第Ⅴ章　総　　括

第１節　石垣保存修理の成果

本書にて報告した石垣保存修理箇所は、崩落している箇所を持つ石垣がほとんどであった。そのため、これまでの石垣保存修理はこれ以上の石垣の崩壊を防ぐことと、城跡としての景観を維持していく上では、最大の成果といえる。彦根城跡は単なる城跡としてではなく、観光地としても全国的に名が知られているため、大変多くの人が出入りすることとなる。こうした観点から遺構の適正な保護と同時に安全面の確保にも努めることができたと考えられる。

また、石垣保存修理に伴って実施した調査からは、特に内堀沿いの石垣の構造が概ね解明できたことが大きい。平成12年度の調査成果からは、石垣の地盤沈下を防ぐために松材を使用した胴木が確認できた。これは第Ⅱ章第３節に示した現状変更一覧の中の中堀試験掘削においても確認されている。つまり、内堀・中堀沿いの石垣においては根石基礎に胴木が設置されている可能性が極めて高い。このことは、絵図などから推定されていた彦根城第１郭を構成する金亀山周辺が元々湿地帯であった点を追認する資料が得られたということになろう。また、平成18・19・20年度の調査成果からは、主に内堀沿いの石垣裏込めの様相を確認することができた。基本的には栗石層の幅は狭く、版築状の盛土が施されて裏込めを形成していること、さらに、石垣上部に築かれた土塁も、石垣裏込めの延長で築かれていることが確認できた。また、一部では最低一度は江戸時代の中で修理されていることが土層断面から確認できた。

第２節　石垣保存修理の課題

上記のような成果があった一方で、多くの課題も浮き彫りとなった。石垣保存修理の実施は、修理対象の石垣が持つ歴史情報を石垣解体工という行為に伴い失わせることとなる。その時、必ず実施しなければならないのが記録保存ということになる。この際、問題となるのはやはり記録の仕方・精度についてかと思われる。今回報告した石垣保存修理箇所においては、主に現況測量と石垣解体完了時の発掘調査に伴う土層断面観察を中心に実施している。しかし、今後はさらなる記録が必要かという検討と現在の測量精度で十分なのかどうかという検討が必要と考えられる。また、これらの調査成果が石垣積直工にどれだけ反映されているのかも検証すべき課題と考える。一度、石垣を解体し、積み直してしまうと、それはやはり現代の石垣と言わざるを得ない。それをどこまで、当時の石垣に近づけるのかが、文化財的な石垣保存修理といえよう。その際、石垣保存修理の十分な工法選択などを検討する必要があるが、これまで単年度で一か所ないし複数箇所の石垣保存修理を実施してきたが、果たしてこのようなやり方が本当に遺跡にとって適切なことかどうかも検討する必要がある。